

昭和二年の溥儒の来日について

呉 孟 晋

は じ め に	393
I 「学歴自述」と先行研究	395
II 溥儒について	397
III 『文字同盟』にみる来日報道	398
IV 来日歓迎の宴	401
V 溥儒の「乗桴集」と溥徳の「碧津集」	403
VI 京都での旅程	405
VII 田邊碧堂らとの交友	406
VIII 帰国後の交流	408
お わ り に	409

は じ め に

余三十三歳、為遜位後十七年（即丁卯年）、応日本之聘為日本京都帝国大学教授⁽¹⁾。
（私が33歳、遜位から17年（すなわち丁卯の年）の時、日本の招聘に応じて京都帝国大学教授となる。）

これは中華民国期の北京で清朝の王孫につらなる恭親王府にいた愛新覚羅溥儒（字は心畬、1896–1963）が「遜位後十七年」、すなわち清朝最後の皇帝・宣統帝（愛新覚羅溥儀、1906–1967）が退位して17年目の中華民国十六年（1927）に日本をはじめて訪れたときのことふれた回想「学歴自述」（図1）である。

日本でいえば昭和二年、大正天皇が前年の12月に崩御して元号が「昭和」にあらたまつたばかりのこの年の春、上海の四一二事件など、どことなく落ち着かない世情のなか、招



図1 「心奮學歴自述」(朱伝誉主編『溥心奮伝記資料』天一出版社、1979年より)

聘をうけていた溥儒は来日し、「京都帝国大学教授」となったという。民国期には北京拠点の京派の画家としてその名が知られた溥儒が、どうして美術学校のように制作課程のない京都帝国大学の教授となったのか。縁あってその後身の京都大学で中国絵画史を研究することになった筆者にとっては、なんとも気になる出来事であった。

この回想は、溥儒みずから語った「学歴自述」のなかの一節であり、溥儒没後の1979年に台北で出版された『溥心奮伝記資料』に収められている。その後、現在に至るまで伝記と年譜が編まれているが、どれも昭和二年の来日にかんする事項は、ほぼ「自述」に沿った記述になっている。溥儒はその生涯で二度来日しており、この昭和二年のほか、国共内戦後に台湾に移住してからの昭和三十年(1955)から翌三十一年にかけて一年ほど東京に滞在している。こちらについて溥儒はみずから多くを語っていないが、弟子たちの回想などからある程度のことはわかっている⁽²⁾。

本稿は、昭和二年の溥儒の来日という民国期中国の画家による交流活動の実際をみてゆく。画家の「自述」という公刊資料を端緒にして、その記述について当時の北京で刊行されていた中文・日文併記の文学雑誌『文字同盟』や交流のあった人たちの詩集などを手がかりにして復元的な考察を加えてゆく。溥儒という「遺民画家」の画業のなかで、来日という事績がどのように位置づけられるのかをあらためて問い直してみたい。

I 「学歴自述」と先行研究

まず、「昭和二年の来日」について、これまでの溥儒の年譜や伝記の記述を確認しておく。

冒頭の「学歴自述」は、1975年に黄務成氏が台北で発行されていた雑誌『伝記文学』に「溥心畬大師学歴自述」と題して紹介して広く知られるようになった資料である。79年には、朱伝誉主編『溥心畬伝記資料』（台北：天一出版社）にも収録された。

黄氏の按語によれば、溥儒が台湾師範大学で教鞭をとるにあたり、大学当局から求められて執筆したものであると伝え聞いているという。そうであれば、溥儒が蒋介石政権とともに台湾に来た1949年の秋にしたためられたことになる。原本は、国民党元老の于右任の幕僚であった張目寒（1902-1980）の所蔵で、末尾に行政院院長をつとめた馬寿華（1893-1977）が「庚戌」、すなわち1970年にしるした識語がある。

溥儒は特徴的な小字でことこまかく墨書しているが、「京都帝国大学教授」の一節は、本文の後ろから三行目あたりに後から追記するかたちで、さらに小さな字でしるされている。ここから当初の記載にこの一節はなく、推敲の段階で附記されたことがわかる。

この「自述」は日中戦争までで終わっており、末尾に「ここに学歴について述べたが、これを広めてほしくはない。それゆえに忌憚なく詳しく述べたものであり、わたしの学歴について疑問をもつ者に示して、明らかにしてほしい」とある⁽³⁾。あくまでみずからの経歴を正確に示すためにしるされたものであり、公開を前提としていなかった。

「学歴自述」のあとに、まとまった成果として挙げることができるのが、台北の国立故宫博物院に溥儒の書画群が寄贈されたのを機に、1993年に出版された『溥心畬書画文物図録』と『溥心畬先生詩文集』である⁽⁴⁾。『詩文集』に収録されている「溥心畬先生年譜」には、次のように記載されている。

1927年 丁卯 32歳

日本の大倉商行の招待に応じて、弟の僊と日本に赴き、経学を講述する⁽⁵⁾。

故宫の「年譜」では、「京大教授」のことにはふれず、「大倉商行」の招待で弟の溥僊（1906-1963）と来日し、四書五経の解釈についての「経学」を講じたことをしるしている。

つづいて、2002年に台湾の画家で作家の王家誠氏が上梓した伝記の『溥心畬伝』は、『故宫文物月刊』での連載をまとめたもので⁽⁶⁾、故宫の「年譜」にみずからの取材や研究の成果を加えている。

来日については、「彼〔溥儒〕が三十数歳のときに書いた一篇の自伝のなかでは、ただ三十歳前後で画を習いはじめたとあるのみで、三十二歳で日本に行って京都帝大教授に任ぜられたことについてはふれられていない」としている⁽⁷⁾。「大倉商行」とのかかわりは、溥儒の子どもに取材したか、もしくは伝聞のようで、「溥心畬と溥儒が連れだって日本に赴いたことは、溥儒の子である毓峯〔字は継明〕がインタビューを受けたとき、溥心畬と溥儒は日本の大倉商行の招聘に応じて日本に赴いたと明らかにした。商行は勢いがあり、中国と日本の名士を招いての雅集〔文人たちの宴会〕であり、酒を飲み、詩を賦して、親睦的な活動であった」〔 〕は引用者による注釈。以下同）としている⁽⁸⁾。

『溥心畬伝』では、つづけて旅行のようすについてのべる。

彼が民国十六年の春に日本に遊んだときの詩のなかに書いている。

海上嘉賓宴、…（後略）《丁卯三月講經日本与諸公宴芝山紅葉館》

詩の題名のなかに「講述日本」とあるのは、おそらく短期の講座の意味であろう。そして、「学歴自述」のなかの「招聘に応じて日本の京都帝国大学教授となる」の由来となったのであろう⁽⁹⁾。

王氏は、後年に公刊された溥儒の詩集『西山集』にもとづいて、このように推論をのべている。溥儒の詩文は故宮編の『溥心畬先生詩文集』で通覧できるが、この稿で紹介する日本滞在期の作は収録されていないものも多い。さらに、来日時の出来事として、「遺憾に感じるのはこのとき身につけて携行していた「聚猿図」を、溥心畬はとうとう日本人に売ったことであり、後に大阪市立美術館の所蔵となった」と⁽¹⁰⁾、溥儒所蔵の書画を売却したとしている。このことについては、節をあらためてみたい。

最近の研究では、2017年に中国の龔敏氏が上海書画出版社のシリーズ「書画名家年譜大系」から刊行した『溥心畬年譜』が現存作品や資料から詳細かつ精緻に溥儒の事績を再構築している⁽¹¹⁾。たとえば、溥儒は民国三年（1914）にドイツのヘンリー親王の招待でベルリンを訪れているが、その後、ベルリン大学で生物学と天文学の博士号を取得したとされる。龔氏は、先行研究の整理とドイツの知人への委託調査により、事実として確認できなかったと指摘する⁽¹²⁾。来日の箇所は、ほぼ王家誠氏の記述に沿っているが、それぞれの事項に註が附されており、記述の典拠がわかる⁽¹³⁾。

このほか、溥儒についての画集や図録、研究書は数多い⁽¹⁴⁾。最近の論文では、杭春曉氏が清朝の遺民としての溥儒の処世について羅振玉や王国維、陳宝琛（1848-1935）らとくらべて考察しており、本稿であつかう内容に近くて示唆に富むが、来日についてはふれられ

ていない⁽¹⁵⁾。

II 溥儒について

溥儒は民国期中国から戦後台湾にかけて画家として抜群の知名度を誇っており、当時から彼の紹介記事については枚挙の暇がない。そのなかでも簡にして要を得ているのが昭和十五年（1940）、日本占領下の北京（当時は北平）にて編まれた日文の人物事典『中国文化界人物総鑑』に載る溥儒の項である。

溥儒（一八九六～）

字は心畬、号は西山逸士、満洲宗室の人、溥儀の兄。辛亥革命の後西山台戒寺に隠居して読書十五ヶ年、後北宗の山水画を研習、近くは国立北京芸術専科学校絵画科国画組教員に任ず。近くまで北京後門外三座橋恭王府内に住む。その著に「西山集」、「凝碧餘音」、「戒台寺志」、「雲居寺志」、「上方山志」、「瑯環紀餘」、「寒玉堂文集」など。その画作については張大千と相並び南張北溥と称せらるほど名声をあげてゐる。また詩文を好む⁽¹⁶⁾。

画家として、溥儒は宮廷画院の系譜につらなる北宗の技巧的な山水を基礎とし、当時の画壇で上海などを拠点にしていた張大千(1899-1983)と南北で名声を二分していたことはよく知られていた。「近くは国立北京芸術専科学校絵画科国画組教員に任ず」とあるのは民国二十三年（1934）からのことであり、美術学校で教鞭を執ったのは文人画家としての声誉が確立してからであった。その後の国共内戦により、国民党が統治する台湾に渡り、張大千と黄君璧(1898-1991)とともに「渡海三家」と称され、戦後台湾の画壇を代表する大家となった。

この『人物総鑑』の記載に補うところがあるとすれば、「満洲宗室の人」という溥儒の家系についてであろう。元の姓は愛新覚羅で、名が溥儒。その名の溥儒、もしくは字の心畬に「溥」を姓として加えた溥心畬で通行したこと。また、「溥儀の兄」というが、いまでは道光帝の曾孫であり、宣統帝の従兄というほうがわかりやすいだろう。弟にあたる溥儀は、字を叔明といい、室名は蕉雪堂。音韻学・文字学を専門とする学者であり、詩文に秀でた。その著に『周易古誼』、『蕉雪堂詩集』などがある。

あえて溥儀にふれているのは、画家・溥儒の文学者としての側面を強調するためであろう。著作に挙げられているものの多くは詩文集であり、末尾に「また詩文を好む」の一

文を加えて、詩文にしたしんでいることを伝えている。

これを執筆したのは、東方文化事業総委員会に籍をおき、北京人文科学研究所の運営にかかわっていた、中国古典文学・文献学者の橋川時雄（1894-1982）である。

橋川時雄は明治二十七年（1894）、福井県酒生村（現福井市酒生町）の生まれ⁽¹⁷⁾。号は酔軒、子雍という。福井県師範学校（現福井大学）卒。大正七年（1918）北京に渡り、同十一年から昭和二年（1927）まで、漢字紙『順天時報』記者。昭和二年、文字同盟社を立ち上げ、雑誌『文字同盟』を同六年まで発行した。昭和三年から同二十年まで、東方文化事業総委員会に勤務、北京人文科学研究所の運営にもかかわった。「続修四庫全書提要」（漢文）編纂を主宰。戦後は京都女子大学、大阪市立大学、二松学舎大学で教鞭を執った。編著書に『陶集版本源流攷』（1931年）、『中国文化界人物総鑑』（1940年）などがある。

橋川は北京で日系新聞の学芸記者からその職歴がはじまった、いわゆる「支那通」の知識人であり、昭和二十一年（1946）に帰国するまで中国にいた。詩文をとおして溥儒本人とも親交があったゆえに、溥儒の項には彼の文学的な素養もあわせて強調されていたわけである。

Ⅲ 『文字同盟』にみる来日報道

溥儒が自らの創作において詩文に力をおいていたこと、そして当初、周囲もそれを評価していたことは、昭和二年（1927）春に溥儒がはじめて日本に来遊することになった経緯にもつながってくる。

これまでこの初来日については、冒頭であげた溥儒本人による回想のみで、詳しいことはわかっていなかった。しかし、前節の『中国文化界人物総鑑』の編者である橋川時雄が個人で刊行していた日華両文雑誌『文字同盟』をみると、この来日が日華文人の詩文交流のために企画されていたことがわかる⁽¹⁸⁾。

民国十六年（1927）4月の創刊号に、「大倉男爵等函招待中国学人賞桜——由趙次珊翁推挙＝溥心畬等赴東（桜花時節支那詩人学者の東遊）」の記事があり、次のように報じられていた。

日本大倉聴松（喜七郎）男爵及犬養木堂平沼男爵等、この桜花盛開の時節^{ママ}に於て、支那の碩儒詩人をむかへて、大いに風雅を東都に揚ぐるために、国史館館長趙次珊（爾巽）翁にその人選かたを依頼した。溥心畬（儒）溥叔明 陳鼎丞（宝鑾）等三氏選ばれて、すでに本月〔四月〕九日北京を發し日本に向つた⁽¹⁹⁾。

溥儒たちを日本に招聘したのは、大倉喜七郎（号は聴松、1882-1963）と犬養毅（号は木堂、1855-1932）、平沼騏一郎（号は機外、1867-1952）であった。

犬養と平沼はともにのちに首相となる著名な政治家であるので、実際には大倉が中心となって諸事を差配したのであろう。

大倉喜七郎は、明治十五年（1882）、東京生まれ。大倉組（現大成建設）や中国に「大倉洋行」として進出した大倉商事などを束ねた大倉財閥創始者の大倉喜八郎（1837-1928）の嗣子である。喜七郎は第二代総帥にあたり、ホテルオークラを開業した。文化芸術に造詣が深く、音楽方面では大倉音楽研究所を設立。「田植」「砧」「水郷」などを作曲し、楽器の改良も手がけた。また、聴松の号で『観月集』（1926年）や『南汎集』（1928年）といった漢詩集を刊行する文人でもあり、上海で著名な書画家の呉昌碩（1844-1927）らとも交友した⁽²⁰⁾。

もっとも、犬養は漢詩文に長けて中国文物にも詳しく、五一五事件で凶弾にたおれた昭和七年（1932）には揮毫集『木堂詩墨』が刊行されている。犬養と同じく岡山出身の平沼も東洋古典籍の収蔵と研究をおこなう無窮会を創設したり、大東文化学院（現大東文化大学）初代総長をつとめたりするなど漢文教育にたずさわっていた。大正・昭和初期に政財界を主導していた日本のエリートたちの多くは漢文の素養があり、中国の文人たちと胸襟を開いて、つきあうことができていたのである。

「碩儒詩人」の人選は、国史館総裁の趙爾巽（号は次珊、1844-1927）が担った。そのときの状況が『文字同盟』に翻刻が載る趙の尺牘からうかがえる（誌面では日文訳も併記）。

前由増永君転致尊意以貴員国諸名流。擬招待敝国現代之通經学者。及有名詩家。以図交換学識詩趣。並敦友誼。属居紹介之役。具徴甄明儒術。揚於風騷。甚盛事也。

（さきに増永君（北京大倉洋行主任）により尊意拜承仕候。貴国知名の方がたによって、敝国現代の経学者及び有名の詩家を招待して、学識詩趣を取交はし、かつ友誼を敦うする思召にて、紹介の役を仰せ下され候こと、まことに儒術を發明し、風雅を揚ぐる盛事と奉存候）⁽²¹⁾

このとき、「経学者」は、「[大倉からの] 手紙にいうには、経学者は泰西の形式の学問に阿諛するのではなく、純粹な東洋道德の見識をもつ者がもっともふさわしい」とされた⁽²²⁾。

趙爾巽によれば、当初は、廢帝となった溥儀の師傅である陳宝琛の招請を試みたがかなわず、あらためて親日派の政治家であった梁鴻志（字は衆異、1882-1946）と溥儒、弟の溥徳、そして国史館にいた陳宝鑾（字は鼎丞、1873-1953）の4名を選定した。しかし、梁は

張作霖幕下で要職に就くこととなり辞退したため、実際に日本に赴いたのは溥儒、溥儀、陳宝鑾の3名である。趙は、「心^{ママ}審鼎丞両君は、頗る修道につとめられ、おのおのよき性格を持たれ、且つ書画を能くせられ候。叔明は専ら易学を攻究致され居候（心^{ママ}審鼎丞両君。工力性靈。各擅其善長。且兼能書画。叔明並專攻易学）」と、その性格と文才について保証している⁽²³⁾。趙はこのとき、七言詩を二首、詠んでいるが、其二の起聯「頗る惜むらくは神州 尚お兵に苦しむ。巾裾 未だ仙瀛を集める暇あらず（頗る惜神州尚苦兵、巾裾未暇集仙瀛）」とあるように、軍閥割拠で情勢が安定しない北京での苦境を嘆いていた⁽²⁴⁾。

当時の日本では清皇室とのつながりをもとうと画策する人たちもあり、巷のうわさとして中国文物を手広くあつかう山中商会が、溥儀が所有する文物を売却して来日を仲介しようとしていたことまでもが報じられていた⁽²⁵⁾。

ただし、溥儒たちの訪日にはそこまでのつよい思惑があったかどうかはわからない。なぜなら、彼らの旅はもっぱら詩作に充てられていたからである。

『文字同盟』には来日後の続報が載っており、「大倉男等が日支両国の翰墨親善をはかるために、桜花の時節に支那の学者詩人をまねき、以て蘭亭の韻事に擬す、まれに聞く盛事である」とこのたびの文雅の集いを「曲水の宴」で知られる王羲之主宰の「蘭亭会」にたとえて、祝福した⁽²⁶⁾。「西山逸士^{ママ}傅心畬等四月九日出発。東京では日本各名士の歓迎をうけ、信濃旅館に下榻した」と報じて、次のように溥儒を紹介している。

心畬は年わづかに三十を超え、しかも詞藻脱俗、詩書画三絶の妙技をもつ。道中景色にふれて吟歌し、索むるものあればすなはち与へ、頗る邦人のために悦ばれた。実に文学使命の命を辱めざるものである⁽²⁷⁾。

すなわち、溥儒らの来日は日華文人の詩文交流のためであり、溥儒がみずからの創作において詩文に力をおいていたこと、そして当初、周囲も画作よりもむしろ詩作を評価していたことがうかがえよう。

雑誌『文字同盟』は、詩詞文章による日中交流の促進をかねており、その「宣言」で「日支両国同文の大義を闡揚し、両国の士大夫が、學術文学芸術などの上に於て握手し、交歓し、攻守同盟を結ぶといふ標幟をかざして吾等は「文字同盟社」を北京に組織し月刊雑誌「文字同盟」を刊行す」とのべている⁽²⁸⁾。

溥儒らの訪日は、まさに『文字同盟』創刊を祝福するかのような一大事でもあったのである。

Ⅳ 来日歓迎の宴

溥儒一行は、さっそく東京にて大倉喜七郎から手厚いもてなしをうけた。

大倉は芝にあった料亭・紅葉館で歓迎の宴を開き、館森袖海（字は鴻、1863-1942）をはじめ、入江雨亭（名は為守、1868-1936）、国分青厓（名は高胤、1857-1944）、勝島仙坡（名は仙之助、1858-1931）、安井朴堂（名は朝康、通称小太郎、1858-1938）、杉山三郊（名は令、通称令吉、1855-1945）ら当時の日本の漢詩壇に名をつらねる約40人が参集した⁽²⁹⁾。この数は王羲之「蘭亭会」の41名とほぼ同じであった。

主催者である大倉は、次のように七言詩一首を吟じた。

遠従千里迎佳賓、正是艷陽三月春。瀛海煙波鷗夢穩、芝山樓閣暖雲勻。古文鼓吹依同種、東亜興隆在善隣。醉对白桜花爛漫、唯応談笑樂天真⁽³⁰⁾。

大倉は、頸聯で「古文の鼓吹は同種に依りてす、東亜の興隆は善隣に在り」とし、詩文による「善隣外交」に期待を寄せた。

この大倉の一首をふくめて、この宴会での詩文は館森袖海が漢詩欄の編者をつとめていた言論誌『日本及日本人』（政教社）にいくつか註釈・講評つきで収録されている⁽³¹⁾。

たとえば、大倉の次に載る加藤天淵（名は虎之亮、1879-1958）の「紅葉館雅集呈恭西山」は、「芝山の觴詠 逸興は饒（めぐ）り、一堂賓主 是れ同文（觴詠芝山饒逸興、一堂賓主是同文）」と、芝山（芝）での「觴詠」（盃をまわして詩歌を詠むこと）、すなわち「曲水の宴」を詠んだ⁽³²⁾。袖海は「これ当日の実況なり。錚々たる〔とくにすぐれている〕ごときなり（此当日実況。錚錚如也）」と註した。このほか、岡崎春石（壮太郎）「紅葉館雅集次聴松男爵原韵」「同席上分韵」や、川田雪山（瑞穂）「紅葉館雅集次聴松男爵原韵、兼呈叔明鼎丞諸公」なども選定された⁽³³⁾。

日本側の詩文による歓待にたいして、溥儒は「丁卯三月講經日本諸公与宴芝山紅葉館」（「西山集」などに収録）で、次のように応じた。

海上嘉賓宴、衣裳此会難。諸侯金馬貴、歌女玉箏寒。跪進流霞酒、光飛明月盤。天風動環珮、双袖夜珊珊⁽³⁴⁾。

溥儒は、奇を衒わずに「海上の嘉賓の宴」のみやびやかなようすを寿いだ。つづく「雨中紅葉館雅集」（同）は次のとおり。

江戸連春雨、珠簾望翠微。群賢天上集、五馬路旁帰。紅葉開山館、飛花落舞衣。会稽詩酒興、佳会未応稀⁽³⁵⁾。

尾聯は「会稽 詩酒の興、佳会 未だ応に稀ならず」とあり、浙江紹興の会稽山で開かれた蘭亭会にふれている。弟の溥儒は、後述する「碧津集」に収録された「宴芝山紅葉館」で溥儒が「衣裳 此会の難」と詠んだのにあわせて、「裊裊 [もすそとぬいぐつ] 翩翩 佩玉の鳴」としるした。

芝山山館宴群英、裊裊翩翩佩玉鳴。満地桜花人酔後、春風春雨不勝情⁽³⁶⁾。

「紅葉館雅集」は、溥儒一行の旅程でも主たる目的のひとつであった。このあと丸の内の東京会館でも雅集が開かれた。後述する実業家で漢詩人の田邊碧堂（名は華、通称為三郎、1864-1931）が詠んだ「東京会館初晤溥心畬王孫兄弟、次聴松男詩韻」二首は、田邊の没後に編まれた詩文集『衣雲集』のなかに収載されている。

玉璫擎将琥珀紅、名筵喜与客卿同。千年詩礼趁芳躅、人在李唐風氣中。

芍薬花開宮錦紅、風情依約玉人同。王孫剩有傷心淚、不澣豊台煙雨中⁽³⁷⁾。

其一首の首聯「玉璫 [たまのさかずき] 擎 [けい／もちあげて] して将に琥珀の紅、名筵の喜び 客卿と同じくす」のように、田邊の作はゆたかな語彙と、たくみな修辞で、溥儒たちにひけをとらない。其二の尾聯では「王孫 剩して有るは傷心の涙、豊台 [北京の地名] に澣がず 煙雨の中」と、溥儒ら「王孫」の苦衷を察して、彼らの胸襟を開いたことであろう。こうして、幾度となく中日文人の交歓が繰り広げられたようである。

その後の「日本文苑」欄には、陳鼎丞に宛てた本莊三籟（名は堅宏、1863-1934）の「迎陳鼎丞」や本田春城（名は桓虎、1866-1937）の「同題」、谷山老岳（初七郎）「同題」も載っている⁽³⁸⁾。谷山の詩の後半は、「鄰好 長期手を携えるを約し、聯盟 須らく起こして時才を済すべし。亜東 何れの日にか妖霧を排さん、俱に雍熙 [天下がよく治まって、上下の者がともにやわらぎ楽しむこと] を祝い 酒杯を挙げん (鄰好長期携手約、聯盟須起済時才。亜東何日排妖霧、俱祝雍熙举酒杯)」と、緊迫する日中の政治情勢を示唆している。大陸浪人でもあった本莊は、「九州誰復済時艱、豺虎咬人流血殷。要問徐生避秦跡、乗桴浮海到仙山」と詠んだ。

詩中にある「乗桴」（いかだに乗る）とは、『論語』 公冶長第五が典拠であり、乱れた世

のなかを嘆いて逃げ出すことをいう。この「乗桴」が、まさに溥儒の来日詩文集の題目となったのである。

V 溥儒の「乗桴集」と溥儒の「碧津集」

溥儒の「乗桴集」は、昭和二年（1927）9月に『文学同盟』第6号の附刊として発表された。そして、年末ごろには溥儒の「碧津集」とあわせて、冊子『乗桴集』として刊行された⁽³⁹⁾。

橋川時雄は、前号の第5号で「両国文字同盟の好資料」と宣伝している⁽⁴⁰⁾。第6号には、奇しくも溥儒の日本行を差配した趙爾巽の逝去（9月3日没、享年84）を報じた誌面で、溥儒にとって画業の初期作（いわゆる「若描き」）となる「山木清音図」(図2)を掲載している⁽⁴¹⁾。

冊子本にある溥儒の「乗桴集序」は、「子曰」と「乗桴浮海」から説き起こす。その全文は次のとおり。

子曰、道不行、乗桴浮於海。夫九州之外、断髮文身之族、豈先王之民也乎哉。必有聖人、教以礼楽、而使齊於先王之民耳。若夫大道既墜、礼楽凌遲、乗桴而浮海者、齊先王之民与、伍先王之民与。丁卯十二月、西山逸士書。

孔子は「道行かず、桴に乗って海に浮ばん」といった。「九州」（中国）の外にいる「断髮文身〔いれずみ〕の族」（『魏志倭人伝』）は、はたして先王の民だろうか。聖人がいれば、礼楽を教え、先王の民をおさめようとする。もし「大道」（大きな道理）がついて、



図2 山木清音図 溥儒筆（『文学同盟』第6号、1927年9月より）

礼楽もすたれたのなら、桴に乗って海に浮かんでいる者は、先王の民をおさめるのであろうか、それとも先王の民とともにいるのであろうか。清朝が亡くなって十数年、統治の根本である礼楽を失って混迷する中国からいかに乗って日本に渡る溥儒の苦衷に満ちた心情をうかがえる文章である。

冊子本の『乗桴集』に収録されている詩は、次のようにほぼ旅程の順にならんでいる。

「出山海関」、「過朝鮮永登浦」、「宴日本大倉男第」、「望芙蓉峯」、「宴芝山紅葉館」、「芝山紅葉館席上詠妓」、「紅葉館雅集呈田邊先生」、「春日大倉男宅」、「贈田邊先生」、「題浅草寺」、「東遊寄内」、「春日日本得家書」、「題田邊先生瓢」、「春遊日本」、「舟中即事」、「登日光山望瀑」、「日光道中」、「稻荷川」、「霧降瀧」、「中禪寺湖」、「東照宮」、「鶴田」、「鹿沼」、「日暮里」、「鶯谷」、「聞笛」、「客舍茶花」、「暮春東京所見」、「道院花、并序」、「日本聴三浦母彈箏其子吹尺八和之」、「題田邊華画」、「東京詠白杜鵑」、「潮来權歌六首」、「登千葉県山青水白樓」、「胭脂渡、并序」、「宿暁雞館、前臨海」、「銚子泛舟」、「過江島弁天祠、祠祀弁天女神」、「留別日本諸公三首」、「大倉座上諸賢索書戲答」、「夜宴澄霞館觀妓」、「前題」、「觀日本妓小蓮舞」、「望富士山」、「雲湧谷」、「嵐溪舟行絕句」、「寄田邊先生二首」、「延曆寺、在比叡山其国有僧最澄者朝於唐学天台宗歸建此寺」、「清水寺、寺供清水觀音」、「宮島泛舟釣魚同叔明作」、「余歸京都道出三韓聴官妓歌羽衣化鶴之曲其声哀促滿座掩泣雖楚岸啼猿蜀国子規不能過也既醉以酒愴然而賦」、「渡海寄田邊華」、「歸次長城」、「寄日本田邊碧堂」、「送田邊華」。

全55作である。『文字同盟』第6号附刊の「乗桴集」には、45作収録されている⁽⁴²⁾。掲載の順を入れ替えたり、「過琵琶湖」や「憶樂陵李子」、「夢海印上人」、「求海印上人遺集」、「過秦関」などを省いたりするなど、両者には若干の異同がある。ただし、収録されている詩作の詩句の改変はないようである。溥儒の「碧津集」が収録する詩作67作もほぼ同じならびになっている⁽⁴³⁾。

溥儒の「碧津集」の序文は溥儒より長く、詩集を編んだ意図について詳しく説明している。そのなかで、今回の旅程にふれている箇所がある。

今年春、応日本大倉男経師之聘、偕仲兄赴日。出山海関、而東過鴨緑江至朝鮮、更渡海經馬関、而抵江戸（即東京）。与彼邦所謂文人雅士者相往還、非酬酢於高堂、則徜徉於山水、無戎馬之劳心。惟詩歌是務、賓主嘯喩、真不啻置身於金台紫館間也。居月餘而還、途中凡其名山大川、雖迂道、必往游焉。行二十餘日乃歸。

山海関から中国を出国し、鴨緑江を経て朝鮮に至る。そこから馬関（下関）に渡り、東京に着いた。大倉喜七郎の歓待をうけ、中日文人たちの詩歌の応酬に興じた。東京には1月余りいて、帰路は道中にある「名山大川」に立ち寄り、20日余りかけて帰った、という。

詩集収録作の題目とあわせてみると、旅程はおおよそ次のようになるだろう。

紅葉館での雅会のあとは、浅草寺といった東京の名所をまわったり、栃木の日光や千葉の潮来、銚子、神奈川の江の島など関東近郊の行楽地を周遊したりして、詩作にはげんだことがわかる。東京を離れるとそのまま東海道を下り、京都では嵐山で舟下りをして、清水寺や大津の比叡山や琵琶湖で近江八景をめぐった。また、奈良の春日大社にいき、広島
の宮島では舞妓を連れて魚釣りもした。

溥儒の詩作では、その土地にちなんだ修辞を盛りこんでいるのが特徴である。

栃木県鹿沼市で詠んだ「鹿沼」は、「欲向東山去、日夕扁舟回。处处野苹合、空思白鹿来」と、鹿を詠みこみ、東京の「日暮里」は、「悠悠日暮里、日暮水生愁。欲采芙蓉去、風雨滿沙洲」と、「日暮」にかけ、その近くの「鶯谷」は、「鶯谷如盤谷、鳧川勝輞川。桃花与春水、相送夕陽船」と、谷で「盤谷」に、鶯で「鳧川（鴨川）」と対比させた。

なお、溥儒、溥徳と行動をともにしていた陳宝鑾も訪日詩集を編んでいたようである。

陳の訪日の事跡については、かつて出身地である浙江省の郷土誌でふれられたことがあり、平沼と犬養、大倉のほかに「日本皇后太溥」の入江為守（1868-1936）の招待で日本を訪れたとするされている⁽⁴⁴⁾。3月にわたって日本に滞在し、とくに田邊碧堂と勝島仙坡の名を挙げて書画、詩詞の応酬をしたとして、また、大倉喜八郎の米寿記念に得意とする「墨蘭図」を贈ったという。陳の詩文の著作に『蕉祿山窗雜文稿』2冊と『瀛痕草』1巻があるというが、後者はその題名からして日本で詠んだ詩文を編んだものであろう。

VI 京都での旅程

ここで、本稿の課題のひとつである、溥儒と京都帝国大学（現京都大学）のつながりの有無についてである。

溥儒の「碧津集」には「西京聞変」とあり、これは日本の山東出兵をさすのであろう。「戎馬千行涙、関山万里人。悠悠洛陽水、不是洛陽春（日人謂西京為洛陽）」。
ここから5月28日前後に一行は京都に滞在していたことがわかる。

ここまでみてきた「乗桴集」「碧津集」にある詩作からうかがえるのは、溥儒はおそらく京都帝国大学で講義はおこなっていないという事実である。溥儒たちは日本の人士たちと宴があれば詩を賦して交友を深めているが、京都で盛大な雅会が開催された気配はない⁽⁴⁵⁾。

「乗桴集」には、「嵐溪舟行絶句」と「清水寺、寺供清水観音」の2作が、「碧津集」には、「大堰川」、「保津川」、「叫猿峡」、「観瀾峡」、「浪花隈」、「鷹巢巖」、「嵐山」、「嵐溪」、「蒙山」、「渡月橋」、「西京旧宮」、「林丘寺」、「清水寺」、「西京聞変」の14作が京都で詠まれたものと思われる。とくに「碧津集」では嵐山の風景詩が多いが、京都の人士との交歓は詠まれていない。

この時期の京大文学部系の主要雑誌である『藝文』や『史林』、『哲学研究』、『支那学』のほか（1927年6月に死去した王国維を追悼する記事が多い）、『京都帝国大学新聞』、また『京都帝国大学文学部三十周年史』（1935年）には関連する記述をみつけることができなかった⁽⁴⁶⁾。おそらく溥儒たちが京都にいたと思われる5月下旬には、胡適が京大を訪れていた⁽⁴⁷⁾。

中国の知識人で京大に関係したのは、昭和七年（1932）に中国語学文学の嘱託講師として東方文化学院京都研究所（現京都大学人文科学研究所）に赴任した傅芸子（1902-1948）が知られており、橋川の詩のなかには、「贈傅芸子之西京講学」がある⁽⁴⁸⁾。

溥儒は日本をはなれるにあたり、「留別日本諸公三首」と題して次のように詠んだ。

凌滄高挂片帆孤、猶似荊門夜向呉。回首無心望江水、愁雲明月滿蓬壺。
楊花飛盡水悠悠、送客歸來獨倚樓。不見片帆行碧海、惟看天際白雲流。
客散樓空罷管弦、布帆高挂暮雲邊。天風一夜吹愁去、直到蓬萊弱水煙。

溥儒は詩集を閉じるにあたり、当時、日本の植民地であった朝鮮の京城（現大韓民国ソウル市）で「漢陽故宮」を賦している。其三では、「楊柳無声弘苑牆、空宮駐馬暮煙蒼。福溪門外龍山路、不見星車入漢陽」とし、過去の栄華にわが身を重ねたことであろう。

VII 田邊碧堂らとの交友

溥儒が日本滞在中に意気投合したのが、日清汽船の経営などにかかわった実業家、政治家にして、森春濤（1819-1889）の門下として「絶句碧堂」の名をとどろかせた漢詩人の田邊碧堂である。

田邊碧堂は、元治元年（1864）、備中長尾（現岡山県倉敷市）の生まれ。通称為三郎。名は華、字は秋穀という。碧堂は号である。大東汽船社長、日清汽船監査役などをつとめた。明治三十一年（1898）、衆議院議員（進歩党、憲政本党所属）。詩文は森春濤と国分青厓に

師事し、とくに絶句にすぐれた。大東文化学院や二松学舎の教授もつとめた。

溥儒の『乗桴集』には田邊宛の作が8件あり、さきにふれて紅葉館での宴会でも「紅葉館雅集」は「紅葉館雅集呈田邊先生」であって、田邊に宛てた詩作であったことがわかる。

「茅舍臨滄海、先生嬌不群。只應騎白鶴、長嘯萬重雲」（「贈田邊先生」）は、田邊の居宅に迎え入られて詠んだ五言絶句で、田邊は対応するかのように「搖簪鳴珮月臨門、軋覺清風滿小軒。敢擬玉堂瀟灑地、数竿修竹引王孫」（「月夜心畬王孫見訪草堂喜賦」）と応えた⁽⁴⁹⁾。このほか、「題田邊先生瓢」では、「先生挂瓢去、往来白雲裏。不見潁川人、空汲潁川水」と軽妙洒脱な一面ものぞかせている。

溥儒の「題田邊華画」は、碧堂が描いた水の絵によせて、次のように詠んだ。

海客懷書向我揖、自言能画滄溟水。望之不敢挂素壁、恐有蒼龍夜中起。何時衰朽成老夫、袖中万里方壺図。右手亦胝鬢亦枯、醉時下筆翻江湖。図中咫尺落風雨、挟龍之客無時無。

溥儒も「碧津集」にある「贈田邊碧堂」で、註として「碧堂名華、工詩善画、東国之知名士也、訪余於旅舍、為仲兄及余作画数幅、值天微雨、涼意颯然、爰賦詩贈之」と、その画作にもおよぶ、碧堂の多才ぶりを称賛している。

一方の田邊の詩作は、没後刊行された『衣雲集』にまとめられている。このなかで、溥儒の日本滞在にかんしては、さきに紹介した「東京会館初晤溥心畬王孫兄弟、次聽松男詩韻」のほかに、「月夜心畬王孫見訪草堂喜賦」一首、「聽松男東道、迎心畬王孫游潮来、余亦在一行中重作潮来竹枝」三首、「与溥王孫心畬叔明両公別」二首が収録されている。

清室親王今客卿、花前把臂感平生。欲憐李白少仙分、不見瀛洲三月桜。

草衣花下醉時吟、得和王孫清夜琴。此別三千里天杳、相知二十日春深。

なお、『衣雲集』にある、「舟中望息栖祠」、「沙邱」、「犬吠岬觀潮」、「銚子曉鷄館所見」も千葉旅行に同行していたときに詠んだものであろう。

田邊のほかにも、溥儒たちの旅行に同道した漢詩人たちの詩作がいくつか残っている。

たとえば、近代漢詩壇を代表する随鷗吟社で主事をつとめた仁賀保香城（名は成人、1877-1945）は、さきにふれた館森袖海の「日本文苑」に「華嚴瀑」や「送心畬叔明鼎丞西帰游函山共一宿」など、日光や箱根旅行での作が載った⁽⁵⁰⁾。香城の詩集『帶星艸堂詩』には、「同溥西山溥叔明両王孫遊晃山」や「華嚴瀑」、「中禪寺湖」、「銚子曉鷄館同西山叔明両

王孫賦」、「送西山叔明両王孫西帰游函山雲湧谷共一宿」が収録されている⁽⁵¹⁾。

また、東京帝大教授で獣医学を講じた勝島仙坡は、その遺稿集『仙坡遺稿』に「紅葉館雅集次聴松男原韻、賦呈中華嘉賓溥徳陳感貞諸公」や「東京会館宴集攀聴松男瑤礎二首」、「佐原金田楼夜宴（聴松男爵迎溥心畬、溥公賜遊水郷、青厓、碧堂、香城、竹雨及余亦与焉）」、「刀江泛月」、「潮来舟遊十一首」、「銚子夜望」、「銚子曉望」が収められている⁽⁵²⁾。

VIII 帰国後の交流

春の終わりに溥儒たちが帰国して、夏が過ぎたこの年の秋、田邊碧堂は東京美術学校校長の正木直彦（1862-1940）とともに中国を訪問して、さっそく溥儒たちと再会している。

この旅行は、『文字同盟』でもとりあげられている⁽⁵³⁾。なかでも、「一行に加はれる詩人田邊碧堂は日本著名の詩人として、殊に文人士大夫の歓迎をうけ、随処吟詠をもらし、その風韻は、一行中にあつて錦上花をそふるものであつた」と⁽⁵⁴⁾、田邊についてふれており、その詩作を数号にわたって紹介した。

溥儒にちなむものは、「似心畬王孫」の「巖城刁斗夜深聞、無限離情我与君。明日燕山騎馬過、詩人衣上有寒雲」や⁽⁵⁵⁾、「贈溥王孫心畬」の「皎如玉樹立南軒、乱後韜光人品尊。靈筆花開春有色、東風竟不負王孫」がある⁽⁵⁶⁾。

これにたいして、溥儒は「木石居清集答田邊碧堂兼索和作」にて、「銀燭華堂照鬢絲、楚騷重疊屈原辭。梁園秋月明如水、却憶芝山夜宴時」と応じた⁽⁵⁷⁾。

正木直彦の日記には、北京入りしてから11月11日と12日に溥儒と宴席をともした記述があり、大倉洋行が主催した後者の歓迎会には溥傑も同席した⁽⁵⁸⁾。14日には恭親王府に赴き、溥儒のもとで易元吉「聚猿図巻」をはじめとする所蔵品を熟覧している⁽⁵⁹⁾。正木は「燕京に入りしより始て尤品を見る 心境洞然快絶を覚ゆ 観また尽きす 他日を期して辞去」として、その興奮を隠さなかった⁽⁶⁰⁾。

ここで、さきにみた先行研究が指摘していた、溥儒来日時の「聚猿図巻」売却は史実と異なることがわかる。「聚猿図巻」は東洋紡績社長の阿部房次郎が購得することになるが、阿部の蔵品図録『爽籟館欣賞』の第一輯（1930年）ではなく、第二輯（1939年）に掲載されているので、溥儒は1930年代に入ってから売却したのであろう⁽⁶¹⁾。

溥儒たちが来日した翌年、昭和三年（1828）には、東京で藝文社が結成され、戦前期日本を代表する漢詩文雑誌のひとつとなった『東華』の刊行がはじまった。これは、溥儒とも交流のあった漢詩人の土屋竹雨（名は久泰、1887-1958）による企画で、溥儒と溥徳は中国側の「名誉員」として名をつらねた⁽⁶²⁾。藝文社の立ち上げには、竹雨の支援者であった

大倉喜七郎と大倉組にいた親友の仁賀保香城もかわっていたので、前年の来日によりつむがれた縁といえよう。

この年の4月には、大倉喜七郎の父である大倉喜八郎の訃報に接して、溥儒と溥徳は連名で「琪樹凋零仙島今帰玄国鶴、法門遼闊御風常懷赤城宴」との輓聯を送った⁽⁶³⁾。

しかし、溥儒はしだいに日本人士とのつきあいを避けていたようだ。日中戦争がはじまった昭和十三年（1938）9月、正木が北京を再訪して大倉洋行での宴席に出たときにも、その場にいなかった溥儒に思いをはせている⁽⁶⁴⁾。

東方文化学院京都研究所の所員であった長廣敏雄（1905-1990）は、山西省の大同にある雲岡石窟の調査でたびたび訪華しており、当時の画壇の動きにも関心を寄せていた。昭和十九年（1944）ごろの北京の展覧会や画商めぐりをするなかで溥儒について、「私〔長廣〕はこのつつましやかな静けさを保持した画家〔溥儒〕にどうしても会つてみたいと思はないではゐられなかつた。ところが溥心畬氏を紹介してくれさうなひとを、北京に見つけることがどうしてもできないのである」と、面会を試みるもかなわなかったと、くやしさをにじませている⁽⁶⁵⁾。

それでも長廣は、「私の考へは今日の北京では溥心畬氏がもつとも高い画家であると結論しだした。画の奥に汲めどもつくしきれない人品の高さや教養のひろさを感じさせるのは、このひとぐらゐるものである」と、溥儒の画を高く評価した⁽⁶⁶⁾。同書に掲載された溥儒の作品図版は、「野崎先生」への為書きのある山水図（図3）であった。



図3 山水図 溥儒筆
（長廣敏雄『北京の画家たち』
全国書房、1946年より）

おわりに

昭和三十年（1955）の二度目の来日時に溥儒に師事した画家の伊藤紫虹氏は、当時の指導について、はじめは唐詩の暗唱のみを課せられ、画学の教授はかなり後になってからだったと回想する⁽⁶⁷⁾。このほか、身のまわりの世話などをおして溥儒の人となりにふれ

た伊藤氏は、詩や画とは技巧をみせるものではなく、人品がにじみでたものであることを体得したという。

本稿では、今日、画家として知られる溥儒の昭和二年（1927）の初来日という、ごく些細な史実に注目して、その動向についてみてきた。溥儒晩年の「学歴自述」にある、「京都帝国大学教授」という経歴は確認できなかったものの、日本に残る文献資料から日本での詩文をとおした交流の片鱗をうかがってみた。当時の溥儒は画家としてではなく、文学者として来日を招請されたため、記録のほとんどは文学雑誌や私家版の詩文集にあり、伝記的事実が明らかにされなかった感がある。

詩書画の伝統にもとづく中国の芸術において、近代の画家が詩文の教養を有していたのは自明のことである。ただ、溥儒の場合は詩人が後に画を手がけるようになったというべきであろう。それゆえに、溥儒の来日というひとつの史実が曖昧模糊であったのは、美術史と文学史に分断された現在の学知の限界をしめしている。

さらにいえば、本稿で大倉喜七郎による招聘の意図を詩文交流としたが、はたして「旧王孫」の溥儒・僊兄弟の招待に政治的な意図はなかったのでしょうか。詩文と書画でつながる日中の政財界と文化芸術界の様相について、明らかにすべきことはまだ数多い。近代における日中文化交流の様相を十全に理解するためにも、美術史研究と政治外交史研究をどのように連環させるのか。溥儒の来日ひとつとっても、これからの史学研究のあり方に問題を投げかけているのである。

【付記】本稿は、科学研究費助成事業（基盤研究C）「西日本を中心とした来舶清人の書画交流に関する基礎的調査研究」（18K00179）の成果の一部である。

註

- (1) 「溥心畬大師学歴自述」（黄務成整理）、朱伝誉主編『溥心畬伝記資料』台北：天一出版社、1979年、33頁。初出は『伝記文学』第27巻第3期、1975年9月。
- (2) とくに日本で師事した李傳鐸若と伊藤紫虹の回想に詳しい。李傳について、李傳鐸若編著『瀛海填簍——吾師溥心畬旅日逸品集』北京：文物出版社、2010年を参照のこと。伊藤については、拙稿「『旧王孫』が紡いだ詩画の縁——溥儒と須磨弥吉郎、そして伊藤紫虹の「合作」について」板倉聖哲・塚本磨充編『コレクションとアーカイヴ——東アジア美術研究の可能性』勉誠出版、2022年、473-474頁と、拙稿「継承溥儒筆墨的日本画家——論伊藤紫虹の抽象水墨画」『水墨、結束了嗎？——再現筆墨精神国際研討会論文集』台北：雄獅美術、2023年、194-198頁にてふれている。
- (3) 前掲「溥心畬大師学歴自述」、33頁。原文は、「今序学歴、並非欲藉此宣伝。所以不憚詳

- 明陳述者，欲使对余学歴懷疑者，明瞭而已」。
- (4) 国立故宫博物院編『溥心畬書画文物図録』台北：国立故宫博物院、1993年。国立故宫博物院編『溥心畬先生詩文集』台北：国立故宫博物院、1993年。
- (5) 「溥心畬先生年譜」、前掲『溥心畬先生詩文集』(下冊)、8頁。原文は「応日本大倉商行邀請，与弟德赴日講述經学」。
- (6) 王家誠『溥心畬伝』台北：九歌出版社、2002年（簡体字版は、天津：百花文芸出版社、2007年刊。増訂新版は、九歌出版社、2017年刊）。
- (7) 王家誠、前掲『溥心畬伝』（簡体字版）、53頁。原文は、「他在三十幾歲所写的一篇自伝中，只提到自己三十左右才開始習画，對於三十二歲赴日任京都帝大教授事，没有提及」。
- (8) 同前。原文は、「溥心畬和溥德聯袂赴日之事，溥德的兒子毓峴受訪時，表示溥心畬与溥德，是应日本大倉商行邀請赴日。商行為壯大聲勢，邀請中日名人雅集，飲酒賦詩，属聯誼活動性質」。
- (9) 王家誠、前掲『溥心畬伝』（簡体字版）、54頁。原文は以下のとおり。「他在民国十六年春天游日詩中写：海上嘉賓宴，…（中略）…詩題中的“講經日本”，可能是短期講座的意思，也可能為《学歴自述》中，“応聘為日本京都帝国大学教授”的由来」。
- (10) 王、前掲『溥心畬伝』（簡体字版）、55頁。原文は、「令人遺憾的是，此次隨身携行，溥心畬竟將《聚猿図》讓售給日人，後為大阪市立美術館珍重典藏」。
- (11) 龔敏編著『溥心畬年譜』（書画名家年譜大系）、上海：上海書画出版社、2017年。
- (12) 龔敏編著、前掲『溥心畬年譜』、9-10頁。
- (13) 龔編著、前掲『溥心畬年譜』、19-20頁。該当箇所の記述は次のとおり。「三月，先生与弟德应日本大倉商行之請，赴日講述經学。作《丁卯三月講經日本与諸公宴芝山紅葉館》、《雨中紅葉館雅集》、《霧降瀧》、《利根川泛州》、《澄懷館觀妓舞》、《嵐山行舟》諸詩。以家伝易元吉《聚猿図》售与日人，現藏日本大阪市立美術館」。註に挙げている文献は、すでにふれた台北故宫編『溥心畬先生詩文集』のうち「年譜」と「西山集」、王家誠『溥心畬伝』、そして溥儒「学歴自述」である。
- (14) おもなものとして以下を挙げることができる。『溥心畬画集』台北：国立歴史博物館、1976年。『張大千溥心畬詩書画研討会論文集』台北：国立故宫博物院、1994年。王耀庭『溥心畬』（中国巨匠美術週刊第85期）、台北：錦繡出版、1996年。王彬『溥心畬』（中国名画家全集）、石家莊：河北教育出版社、2003年。詹前裕『台湾近現代水墨画大系 溥心畬——復古的文人逸士』台北：芸術家出版社、2004年。王瓊馨『溥心畬詩書画研究』台北：文津出版社、2013年。劉芳如主編『溥心畬書画特展——文人画最後一筆』図録、台北：国立故宫博物院、2021年。日本語文献では、鶴田武良「近代中国画人伝2 溥心畬——最後の文人画家」『季刊水墨画』第21号、1982年7月がよくまとまっている。
- (15) 杭春曉「晚清遺民的出世、入世——以溥心畬為中心的精神分析」『美術觀察』2020年第10期。
- (16) 橋川時雄編『中国文化界人物総鑑』北京：中華法令編印館、1940年、616頁。
- (17) 橋川時雄の略伝については、今村与志雄編『橋川時雄の詩文と追憶』汲古書院、2006年や、高田時雄編『橋川時雄 民国期の学術界』臨川書店、2016年などを参照した。
- (18) 雑誌『文字同盟』については、今村与志雄「解題」『文字同盟』（影印本）第3巻、汲古書院、1991年を参照のこと。
- (19) 「大倉男爵等函招待中国学人賞桜——由趙次珊翁推挙 = 溥心畬等赴東（桜花時節支那詩人

- 学者の東遊)』『文字同盟』第1号、1927年4月、32頁(影印本は、今村与志雄編、全3巻、汲古書院、1990-1991年)。
- (20) 松村茂樹「呉昌碩と大倉喜七郎——併せて呉昌碩最晩年の代刻と真刻を論ず」『大妻国文』第30号、1999年3月。松村『呉昌碩研究』研文出版、2009年に再録。
- (21) 前掲「大倉男爵等函招待中国学人賞桜」、33頁。
- (22) 孫師鄭「日本大倉男爵与犬養毅翁、平沼男爵諸老会邀請吾国有名之經学家各三人往遊東瀛、与彼国学者詩人研究東方旧学、辱採虚声、微及下走、憚於行役、謹以疾辞、仍用元旦詩韵、賦二律謝之」「詩苑文壇」『文字同盟』第1号、37頁。原文は、「函云。經学者以不阿諛泰西之形式的学問。而具有純粹東洋道德之識見者。為最合宜」。
- (23) 前掲「大倉男爵等函招待中国学人賞桜」、34頁。この文言は趙爾巽が大倉喜七郎に宛てた書簡のなかにある。
- (24) 趙次珊「大倉聽松男爵属延經学詞章專家於桜花節中為文酒雅集、既介衆異、心奮、鼎丞、叔明四君応招東游、賦寄志盛、即希吟教」「詩苑文壇」『文字同盟』第1号、36頁。その詩は次のとおり。「(其一) 蓬萊消息報柴関、儒雅遥期与古攀。經席重邀朱舜水、詩名争訊白香山。主盟敢自臨牛耳、選異尤当聚虎班。最服宗伝尊正学、南豊同在辦香間(来意挙及曾文正公、謂為承嗣宣聖統系)。／(其二) 頗惜神州尚苦兵、巾裾未暇集仙瀛。飛輶暫負賢隣約、卓塵還容異日傾。待見旧像高束帛、極知吾道重千城。雅歌先介三詞客、点綴桜花眼倍明」。
- (25) 『国民新聞』1927年1月8日付朝刊。東京美術学校編『近代美術関係新聞記事資料集成』第46巻(マイクロフィルム)、ゆまに書房、1991年。
- (26) 「桜花爛漫処、迎宴傳心^{ママ}奮一行——大倉男爵招邀中国詩人之消息」『文字同盟』第2号、1927年5月、23頁。
- (27) 同前。
- (28) 「宣言」『文字同盟』第1号、1927年4月。
- (29) 前掲「桜花爛漫処、……」、23頁。
- (30) 同前。
- (31) 館森袖海選「日本文苑」『日本及日本人』第124号、1927年5月、90頁。館森の註釈は次のとおり。「袖海曰、聽松君所招名士、即恭邸西山、恭邸公賜、凍^{ママ}鼎丞、陳硯孫也。聚者入江雨亭、国分青厓、勝島仙坡、安井朴堂、杉山三郊諸君。凡四十人。余亦与焉。極為盛会」。これはさきに紹介した『文字同盟』第2号(5月発行)の記述とほぼ同じであり、橋川はこの館森の註釈を参照したのであろう。
- (32) 加藤天淵「紅葉館雅集呈恭西山」、前掲『日本及日本人』第124号、90頁。全文は「桜花映月白紛紛、才筆雕龍辞湧雲。觴詠芝山饒逸興、一堂賓主是同文」。
- (33) 館森選「日本文苑」『日本及日本人』第126号、1927年6月、85-86頁。
- (34) 溥儒「丁卯三月講經日本諸公与宴芝山紅葉館」。前掲『溥心畬先生詩文集』(上冊)、4頁。
- (35) 溥儒「雨中紅葉館雅集」、前掲『溥心畬先生詩文集』(上冊)、4頁。
- (36) 溥德「宴芝山紅葉館」「碧津集」。
- (37) 田邊碧堂「東京会館初晤溥心畬王孫兄弟、次聽松男詩韻」『衣雲集』(下冊)、田邊綾夫刊行、1932年。
- (38) 館森選「日本文苑」『日本及日本人』第132号、1927年9月、80頁。袖海の註は「鼎丞受此等贈詩。可謂榮矣」。
- (39) 『文学同盟』附刊と刊行本では、附刊の収録作が少ないうえに若干の異同がある。刊行本

- は国内では九州大学中央図書館と東京都立中央図書館（実藤文庫）にあり、筆者は九州大学本を閲覧した。同年12月の序はあるが刊記はなく、私印本として刊行されたようである。
- (40) 「溥心畬東游詩 本誌第六号附刊」『文字同盟』第5号、1927年8月（刊行年月記載なし）、7頁。
- (41) 「超次珊逝世」、「溥心畬山木清音図」『文字同盟』第6号、28-29頁。
- (42) 附刊収録の詩作は次のとおり。「宴日本大倉男第」、「望芙蓉峯」、「宴芝山紅葉館」、「過琵琶湖」、「過朝鮮永登浦」、「出山海関」、「春夜宴大倉男宅」、「紅葉館雅集呈田邊先生」、「贈田邊先生」、「題浅草寺」、「春日日本得家書」、「東遊寄内」、「題田邊先生瓢」、「春遊日本」、「舟中即事」、「登日光山望瀑」、「日光道中」、「稻荷川」、「霧降瀧」、「鹿沼」、「江島」、「泉岳寺」、「日暮里」、「荒川」、「東照宮」、「中禪寺湖」、「鶯谷」、「客舍茶花」、「聞笛」、「暮春東京所見」、「道院花」、「日本聴三浦母彈箏其子吹尺八和之」、「東京詠白杜鵑」、「題田邊華画」、「銚子泛舟」、「宿眺雞館」、「登千葉県山青水白樓」、「潮来權歌」、「權歌」、「胭脂渡、并序」、「留別日本諸子」、「憶樂陵李子」、「夢海印上人」、「求海印上人遺集」、「過秦関」。
- (43) 溥儒の「碧津集」に収録されている詩作は次のとおり。「出山海関」、「宴芝山紅葉館」、「江戸諸子招飲即席賦成」、「贈田邊碧堂」、「小金井觀桜」、「宴大倉男宅、是日雨過寒甚、因戲成一絶」、「觀海」、「大倉男招諸名士、宴於東京會館、分韻得鮮字」、「月」、「贈田邊碧堂」、「日光山觀霧降瀧」、「華巖瀧」、「般若瀧」、「東照宮」、「晃山」、「日本川口氏招飲、其夫人彈琴、即席賦詩謝之」、「院中杜鵑花」、「月夜渡利根川」、「香取神社」、「鹿島」、「息栖祠、祀水神」、「十二橋」、「刀江」、「水郷」、「宴潮来福弥館、聞妓哀歌」、「潮来權歌」、「潮来曲」、「胭脂渡」、「千葉県」、「春江贈別」、「銚子海望月」、「望海」、「将行留別江戸諸子」、「留別大倉及日本諸公」、「将別東京大倉男及江戸諸名士餞於澄霞館席上觀妓即呈送別諸公」、「澄霞館贈舞妓春枝」、「澄霞館別妓」、「八幡宮」、「江島」、「函山」、「大涌谷火山」、「大堰川」、「保津川」、「叫猿峽」、「觀瀾峽」、「浪花隈」、「鷹巢巖」、「嵐山」、「嵐溪」、「蒙山」、「渡月橋」、「西京旧宮」、「林丘寺」、「清水寺」、「西京聞變」、「延曆寺」、「近江八景」、「奈良春日神社」、「宿舞子万亀樓」、「旅舍不寐」、「携妓泛舟宮島、戲呈仲兄心畬」、「弁天祠」、「馬関道中聞變」、「門司枕閣即景」、「朝鮮京城」、「漢陽聞妓歌愁心」、「漢陽故宫」。なお、「林丘寺」の「丘」は欠画になっている。
- (44) 汪宗德「陳鼎丞」『浙江檔案』1989年第6期、32頁。
- (45) 当時の京都で発行されていた『京都日出新聞』の昭和二年（1927）3月から6月までの紙面を閲覧したが、溥儒来洛にかんする記事を見つけないことができなかった。
- (46) 閲覧した資料は、京都大学文書館にある文学部庶務掛作成「諸向往復書類」（昭和二年）と、同「雜綴」（昭和二年）である。
- (47) 「支那学会の胡適氏歓迎会」『京都帝国大学新聞』第52号、1927年5月21日付、第4面。
- (48) 今村、前掲『橋川時雄の詩文と追憶』、29頁。
- (49) 田邊華著『衣雲集』（下冊）、田邊綾夫刊行、1932年。
- (50) 仁賀保香城「華巖瀑」館森選「日本文苑」『日本及日本人』第126号、1927年6月、86頁。同「送心畬叔明鼎丞西帰游函山共一宿」『日本及日本人』第130号、1927年8月、74頁。後者は其三で、「峨峨函山頂、与君各西東。驪歌唱已罷、把手談尚同。蒼茫落日下、澗壑咽松風。忽失烏帽影、悵望乱雲中」と賦し、袖海は、「三首有情有景。而氣格音節。居然有唐賢之遺」と評した。
- (51) 仁賀保成人著、渡邊万介編『帶星艸堂詩』柳田伊秀発行、1938年。

- (52) 勝島仙坡著『仙坡遺稿』卷三、1934年。たとえば、「東京会館宴集攀聽松男瑤礎二首」の其二は、「緑樹蔵花澹沱春、披襟対酒一宵親。何図東館風流会、邀此西山隱逸人（溥心畬自稱西山隱士）」とあり、「潮来舟遊十一首」の其一では、「清晨乘霽放輕舳、野水縦横繞岸長。江草江花春可采、王孫援筆賦懷郷」と、溥儒らについて詩中でふれている。
- (53) 「正木校長等来華」「学芸大事記（十一月）」『文字同盟』第9号、1927年12月。
- (54) 前掲「正木校長等来華」、40頁。
- (55) 田邊碧堂「似心畬王孫」前掲「正木校長等来華」、41頁。
- (56) 田邊碧堂「贈詩 其二」『文字同盟』第11号、1928年2月、24頁。なお、溥徳には「贈王孫叔明」と題し、「王孫註易遠塵譚、静似山中隱士家。省識天心挽春返、冰天雪窖養梅花」と詠んだ。
- (57) 「詩文」『文字同盟』第10号、1928年1月、37頁。
- (58) 正木直彦『十三松堂日記』第2巻、中央公論美術出版、1965年、532-533頁。11日の前者の招宴は「郭則」（早稲田大学に留学経験があり、このとき政界を引退していた郭則澣のことか）と劉驥業（陳宝琛の甥）が主催した。
- (59) 易元吉のほかには、趙孟頫書冊、温日観葡萄巻、田黄蘭亭刻硯屏（翁方綱書刻）、顔魯公自身告真迹（蔡襄、米友仁跋）、陳白陽山水巻、谿川唱和巻、錢選西旅献熬図巻、梁武帝書、宋人散牧図巻、黄大痴山水巻、周之冕花卉巻の12件である。なお、阿部は「散牧図巻」も入手している。
- (60) 正木、前掲書、535-536頁。
- (61) 「易元吉 聚猿図巻」阿部孝次郎編『爽籟館欣賞』（第二輯）、博文堂、1939年、29-30頁。
- (62) 稲畑耕一郎「日本に遺された傳増湘の詩——併せて『東華』と『雅言』の関連に及ぶ」『早稲田大学大学院文学研究科紀要 第二分冊』第58号、2013年2月、7-10頁。
- (63) 「鶴翁千古」『文字同盟』第14号、1928年5月、36頁。
- (64) 正木、前掲『十三松堂日記』第4巻（1938年9月3日の項）、1552頁。
- (65) 長廣敏雄「中央公園のいろいろの画展」『北京の画家たち』全国書房、1946年、92頁。
- (66) 長廣、前掲書、92-93頁。
- (67) 筆者による伊藤紫虹氏への聞き取りにもとづく（2019年10月10日実施）。